

## 『舞と武』本部御殿手と女踊りについて

「舞と武」について、紫の会琉舞練場の島袋光裕先生、島袋光晴先生と本部流古武術協会の上原清吉先生とその橋渡し役の宮城鷹夫先生により、比較研究が行われ、合同発表会は平成2年3月24日まで7回を数えた。

その資料その他の資料を元に、研究の姿を追ってみたい。おもろさうしには、神女が謡いながら行う、拝み手・押す手・こねり手の手法記載があり、その後の琉球舞踊の女踊りの基本の手の表情に繋がっているとされている。

一方、本部御殿手の技術体系には、基本技「手之元」・実戦技「歩み」・奥義「武の舞」に分類され、「手之元」として学ぶのは型・合戦手・取手・素振り・合戦技がある。この『取手』の形が、琉球舞踊の女踊りの手の表情に酷似ないしは同一として結論づけられている。

さて、『手の表情』を考案する時に、手首関節、肘関節、肩関節、加えて肩甲骨、すなわち上肢帯の運動に注目する必要がある。これら上肢帯、また指関節、手関節の複雑な動きを考えるべきである。すなわちこれらの動きを合成すれば、『手』は空間的に360度、すなわち球面のあらゆる方向へのベクトルが得られることになる。

この球面上を動く指の表情が、おもろから繋がる琉球舞踊の女踊りの美しさの一つである。また、本部御殿手における武の舞の流れるような曲線に繋がっており、これが相対する敵との身体力学的作用により、地球重力の中において意外な方向、意外なエネルギーを生み出すベクトルを発生させるものと思われる。

この観点から、美を追求する琉球舞踊と敵を倒すことを目的にする本部御殿手が酷似するものと思われる。さらに、両者とも、最終的には「ドウウサミ自己修身」「祈り」を目的とするところは全くの合致点であるところが、琉球の精神文化の底流の一つと思われる。

平成28年3月25日

那覇市文化協会 空手文化部会員 大城 康彦  
沖縄県立博物館・美術館ホールに於いて  
「あけもどろ文化祭」